

二〇一七年第四回宝井其角俳句大会

入賞作品

★大賞「膝毛布」

砂山恵子（すなやまけいこ）

愛媛県西条市 五九歳

思い出はリメイク出来ず膝毛布

冬の夜の立てて乾かすベビーバス

立春や点眼薬の上に空

寒明けや卵ゆくりと分裂す

母と子と同じ担任アマリリス

夜桜や母校伝はる七不思議

惜春や乳の色せる水薬

垣間見る戌の日の子の裸かな

星月夜聞こえぬ声と握る手と

星流る分娩室に入る吾子

良夜かな十五時間の陣痛後

新生児と娘の寢息夜長かな

育児すらスマホ相談ちちろ啼く

マスクして母乳与えし乙女かな

墓石なき街に広がる除夜の鐘

冬珊瑚赤子は夢に泣いてをり

小寒やプーさん柄のベビーカー

俺よりも先に死ぬなよ冬桜

僕のこと僕が決めると粥柱

大丈夫とつなぐ手と手や桃の花

★準賞「水の階段」

廣島 佑亮（ひろしま ゆうすけ）

愛知県北名古屋市 五一歳

春の夜や無人のバスの昂ぶりに

雪柳我が胸痛むほど空虚

沈黙の傷あふれだす藤の花

天体へ心の沈む残花かな

うぬぼれに蛍の野心見せつける

音楽の漆黒にあり閑古鳥

卯の花や孤独まみれの我が所業

匂いくる水の階段夏の月

晩涼の光の裏を問ひかける

広大な静寂あふれ源五郎

明易き死者の記憶を彫り刻む

秋蝶や命の際の音一つ

萩の花闇に抗ふごとく散る

月さしてみな生きてゐる寂しさは

愚かなる顔を月夜に遊ばしむ

時々は空にとどまる落葉かな

裸木をおびやかしたる水の咆哮

寒日和小さき色となりにけり

おそるべき光の途申帰り花

塵の音ひとつ残して冴ゆるかな

★準賞「虚と実とーカメレオンパロール」

矢崎硯水（やざきけんすい）

長野県諏訪市 八三歳

初旅の泊り 白亜紀アパホテル

パイレーツトランプ避ける宝船

星座やや傾くだけよ去年今年

